

音楽

ホグウッド指揮ヘンデル
「陽気の人、ふさぎの人、
中庸の人」

評・大木正純

ヘンデルの知られざるオラトリ「メサイア」のような巨大オ「陽気の人、ふさぎの人、中庸の人」(3部構成)の第2部までと、同時期の傑作「聖セシリアの祝日のためのオーケストラ」をひと組にして上演するユニークなコンサートがあった。作曲家自身が数回試みた方式というが、現代においてはおそらく前例がない。これは数年来、地道な成果を重ねてきたヘンデル・フェスティバル・ジャパンが没後250年記念の最終企画として実現したもの。指揮には古楽の大家、クリストファー・ホグウッドがイギリスから招かれた(13日、東京・浜離宮朝日ホール)。

オラトリオは明と暗、動と静、行動と思索といった対立的キャラクターの論争を通して、人間の真理に思いを巡らせて

日本古楽界の躍進を示す

ゆく。「メサイア」のような巨大性はないが、声楽(4人のソロと合唱)も器楽パート(今回は二十数名のピリオド楽器オーケストラ)も、さすがヘンデルと感服する充実ぶりだ。とりわけ連続するソロ・ナンバの多彩な魅力は圧巻。さらにソプラノとフラウト・トラヴェルソ(岩井春菜)の華麗な競演あり、動物の鳴き声や鐘の音等々のいきいきした描写あり、第2部終曲のごとき感動的な名曲ありと聴き手を一瞬も退屈させることがない。

作品を知り尽くしたホグウッドのリード、さらに小ホール空間の利もあって、ソロが好演を披露。佐竹由美の端正・清純なソプラノ、写真・林喜代種撮影、波多野睦美の情感溢れるアルト、辻裕久の軽頼もしいバスと、それぞれに持ち味を発揮した。

そこまでがほぼ2時間。

そのあとにヘンデルが腕に縋りをかけた「オード」が続くのだから、これは何とも豪華なプログラムだ。ホグウッドの格調高い指揮が、魅力満載のこの音楽賛歌を高らかに歌い上げた。

若手主体のオーケストラも大健闘。優れた指導者を仰げば手持ちの陣容でここまでできるという、日本古楽界の躍進を示す出来事だったと思う。



(音楽評論家)